

地域日本語教室における対話を中心とした授業実践

—吉野川市国際交流協会日本語教室をフィールドとして—

鈴木 優 香*, 廣 田 知 子**

(キーワード：日本語教育, 地域日本語教室, 対話中心の活動)

1. はじめに

日本に住む外国人の数は増加の一途をたどり、いたる所で多文化共生を意識した言葉を見かけるようになった。全国の在留外国人の数は約283万人¹ (2019年6月末) となり、100人に2人は外国人という状況である。生活者として地域に暮らす外国人の事情に注目すると共に、そうした外国人に対する日本語教育の充実についても考えていかなければならない。

2019年度「教育実践フィールド研究(国語科)」日本語教育分野のプログラムを始めるにあたり、徳島県国際交流協会国際交流・協力シニアコーディネーターの野水祥子氏に話を伺った。野水氏によれば、徳島県は全国的に見ると、外国人の数が多くとは言えないようだ。(執筆時最新のデータでは、徳島県の在留外国人は6,232人² (2019年6月末) である。)。2004年の5,911人をピークに、2010年以降は5,000人程度で推移していた。しかし、ここ1年半では600人弱も増加しており、徳島県でも在留外国人が増加傾向にあると考えられる、ということであった。

また、県内には、徳島県国際交流協会をはじめとして、11の日本語教室があるそうだ。そのうち、徳島県の委託を受けて開講されている吉野川市国際交流協会運営の日本語教室は、日本語学習を通じて受講者と地域との結びつきが強いのが特徴的で、学習者の数も多いとのことであった。そこで、徳島県国際交流協会の紹介により、吉野川市国際交流協会日本語教室で授業の実践を行うこととなった。

本授業実践報告は、2019年度「教育実践フィールド研究(国語科)」の授業において、吉野川市国際交流協会日本語教室をフィールドとして実践した授業の成果と課題を述べ、考察するものである。

2. 吉野川市国際交流協会日本語教室の実態調査³

まず、今回のプログラムで取り組めることは何かを考えるため、吉野川市国際交流協会日本語教室の実態調査を行った。

吉野川市国際交流協会日本語教室(以後、YIA日本語教室と記載)は、1992年に設立され、今年で27年目を迎える日本語教室である。YIA日本語教室は、毎週日曜日の13:30～15:30に行われている。学習者は、毎回10～20名程度の参加があり、年間延べ100名ほどの登録がある。学習者の多くは、吉野川市近郊で技能実習生として滞在するアジア地域出身の外国人で、出身別にみると圧倒的にベトナム出身が多い。その他、タイ、ミャンマー、フィリピン、中国などから来た学習者もいる。また、日本語レベルは初級がほとんどである。支援者は、徳島県国際交流協会主催の日本語ボランティア養成講座修了生等の7人である。異文化交流のため、1ヶ月に1回程度季節にあわせたイベント(表1参照)が実施されていることも特徴である。

表1 吉野川市国際交流協会日本語教室の主な行事

4月	桜や藤(吉野川市に隣接する石井町の名物)の花見
7月	外国人による徳島県日本語弁論大会に参加
8月	阿波おどり
11月	国際交流協会バスツアー
12月	クリスマス会
1月	餅つき
2月	旧正月のお祝い

2. 1. 吉野川市国際交流協会日本語教室の観察

2019年4月20日に初めてYIA日本語教室を訪れた。支援者5人に対して学習者は14人で、大変活気があって驚いた。学習者は、タイ人1人を除いて全員がベトナム人であり、ベトナム語が飛び交う中で支援者らが生き生きと支援している様子が印象的であった。学習者も支援

*鳴門教育大学大学院 言語系コース(国語)

**鳴門教育大学 人間教育専攻

者もいい笑顔で、心から教室活動を楽しんでいることを感じた。その後も、1 か月に1 回程度訪問し、継続して観察を行った。

2. 2. 学習者と支援者に対する調査

授業実践に先立ち、YIA 日本語教室の特徴やニーズ等を把握するため、学習者と支援者の両方に調査を実施した。

(1) 学習者への調査

調査対象

学習者 19 人

(ベトナム 12 人, ミャンマー 5 人, タイ 1 人, 中国 1 人)

調査方法

紙面によるアンケート (やさしい日本語, ベトナム語, ミャンマー語, タイ語版を用意)

主な調査結果

- ・会話, 方言, 日本語能力試験の勉強をしたい。
- ・生活で使う日本語を勉強したい。
- ・いろいろな日本語のレベルの人と一緒に勉強したい。

(2) 支援者への調査

調査対象

支援者 6 人

調査方法

紙面によるアンケート, 聞き取り

主なアンケート調査結果

- ・日本語の能力のうち「会話」「話す」「聞く」能力を身につけさせたい。
- ・シャドーイングを実践してほしい。
- ・鳴門教育大学大学院生の日本語の教え方を見たい。

主な聞き取り調査結果

- ・学習者からもっと会話したいとの要望があり, 支援者もそれに応えたい。
- ・シャドーイングを実践してほしい。

2. 3. 実態調査のまとめ

2. 1. の観察からは、YIA 日本語教室は非常にいい雰囲気、学習者と支援者が親密な関係を築いていることが分かった。今回の取り組みでは、YIA 日本語教室のアットホームな雰囲気を大切にして授業を実践したいと考えた。

2. 2. の調査からは、学習者と支援者の両方から「会話」に関するニーズがあると分かった。支援者への聞き取り調査からは、学習者の要望に応えたいが使用教材が会話に向いていない、自分なりに会話を取り入れようと工夫しているが難しい、などの事情があることも分かった。これらの調査結果を踏まえて、本授業実践では、対

話を中心とした活動を取り入れた授業を考案し実践することとした。

また、支援者からは、アンケート調査と聞き取り調査のどちらからもシャドーイングに関するニーズがあったため、授業の一部に取り入れることを試みた。

3. 授業実践①

3. 1. 目的

授業実践①では、目的を2つ設定した。

1つ目は、学習者が阿波おどりイベントに参加した際、学習した内容を生かして会話や行動ができるようにすることである。前述の通り、YIA 日本語教室では1ヶ月に1回程度イベントが実施されている。そして、授業実践①の授業日が阿波おどりの開催時期に近く、YIA 日本語教室でも吉野川市の阿波おどりに参加することが予定されていたため、授業のテーマを阿波おどりとした。そして、学習者が実際に阿波おどりに参加することを想定して、イベントの事前学習のようなイメージで授業を考案した。

2つ目は、支援者に対して、対話を中心とした活動、及び地域にあわせたシャドーイングの提案を行うことである。授業実践①では、2. 3. で触れた「会話」というニーズに対して、「対話中心の活動」を取り入れることとした。「対話中心の活動」とは、「外国人参加者と日本人参加者（ボランティア）が対等な関係のもとで、（主に）日本語を用いたコミュニケーションをし、その過程で人間関係を築き、共に学び、変わっていくことのできる活動」である（御館, 2013）。既に構築されている人間関係を基盤とし、学習者と支援者が共に新しいものを創り出す過程で日本語が身に付くと考え、授業を考案した。また、支援者からのシャドーイングを実践してほしいというニーズに対し、地域の特性にあわせた方法を実践し、提案することとした。

3. 2. 概要

日 時：2019 年 7 月 28 日(日) 13:30～15:30

対 象：吉野川市国際交流協会日本語教室

授業者：鳴門教育大学大学院生 4 人

参加者：学習者 15 人（ベトナム 10 人, ミャンマー 4 人, タイ 1 人）, 支援者 4 人

3. 3. 学習目標

- ・日本語を使って相談したり情報を集めたりして、阿波おどりに見に行く計画を立てることができる。
- ・自分たちで立てた計画を発表したり、他の学習者の発表を聞いてコメントしたりすることができる。
- ・阿波おどりに関する語彙を理解し、モデル会話を流

暢に言うことができる。

3. 4. 授業内容

授業内容は表2の通りである。

表2 授業実践①の授業内容

	内 容	形 態
1	自己紹介 (10分)	グループ
2	阿波おどりクイズ (10分)	グループ
3	阿波おどり会話シャドーイング (5分)	全 体
4	阿波おどりを見に行く計画を立てる (30分)	グループ
5	計画の発表 (15分)	全 体

授業の中心は、4で阿波おどりを見に行く計画を立てて、5で発表することである。計画には「食べ物を食べること」「阿波おどりを観ること」「写真を撮ること」「人と話すこと」の4つを必ず入れることとした（資料1参照）。4の活動をするための語彙導入として、2で阿波おどりクイズを行った。続いて、学習した語彙を盛り込んだスクリプト⁴を用いて、3でシャドーイングを行った。

学習グループは、日本語支援者1人と学習者2、3人で構成し、5つのグループに分けた。学習者は、同じ母語の学習者になるべく同じグループにならないよう、授業者が振り分けた。

3. 5. 成果と課題

授業後のアンケートより、学習者が学習目標を概ね達成できたことが分かった。1つ目の授業目的は達成されたと言える。

授業者の観察からは、学習者同士が積極的に日本語で会話している様子が見て取れた。これは、普段は母語が同じ学習グループで学習しているのを、母語が違う学習グループにしたことで、日本語を話す必然性が生じたのだと推測される。また、支援者からは、授業の流れや授業者の話し方について参考になったという感想があった。以上から、2つ目の授業目的であった、支援者に対して対話を中心とした活動の提案を行うことが達成されたと言える。

以上の成果とともに、3つの課題が明らかになった。

1つ目は、学習者主体の対話活動を考案することだ。これまでYIA日本語教室では、支援者主体の授業が展開されてきた。今回の授業実践では、日本語支援者をファシリテーターとして、学習者が主体的に取り組める活動になるよう授業を考案した。しかし、依然として支援者が中心となっており、学習者は受け身で学習している様子であった。3. 1. で述べた通り、対話中心の活動では、学習者と支援者が対等な関係で学習をすることで学習の効果が発揮されると考える。学習者がより主体的に活動

に取り組めるよう、改善を検討する必要がある。

2つ目は、支援者の負担にならない授業を提案することである。授業後、支援者から、授業の準備が大変そう自分たちで行うには難しい、という感想を得た。ニーズに応えようとするあまり、授業内容を盛り込みすぎたようである。支援者がやってみよう、と思えるような授業を提案することが課題である。

3つ目は、シャドーイングの改善である。本来シャドーイングは、イントネーションや発音を矯正する方法であり、ネイティブの声を聞きながら発声することが重要である。今回は一つの音源に対して全員で発声する方法をとったが、学習者の声が音源よりかなり大きかったため、シャドーイングにならなかった。シャドーイング自体が教室活動に向かないのかもしれないが、改善を検討する必要がある。

4. 授業実践②

4. 1. 目的

授業実践②では、目的を2つ設定した。

1つ目は、学習者主体の対話活動を行うことである。3. 5. で1つ目に示した課題について、学習者がより主体的に取り組むためには、学習者自身に関する情報のやり取りが必要だと考えた。そこで授業実践②では、学習者が自分自身について話す活動を取り入れることとした。

2つ目は、支援者の負担にならない授業を提案することである。YIA日本語教室は、支援者がボランティアで運営しているものである。2. 2. (2)の聞き取り調査でも、支援はあくまでボランティアなのでその範囲で行いたい、学習者は授業が始まるまでわからないので授業の事前準備はできない、などの声を聞いていた。しかし、授業実践①では、3. 5. で2つ目に示した通り、支援者の負担を軽減することが課題に残った。これらを踏まえて、既存の教材を使用し授業準備の負担を減らした授業を考案した。そして、支援者に授業を提案するため、授業実践当日は一部の支援者に授業中の観察を依頼した。

また、3. 5. で3つ目に示したシャドーイングに関する課題については、授業内容と関連が薄いと考え、改善案を支援者に提案することで補うものとした。

4. 2. 概要

日 時：2019年12月15日(日) 13:30～15:30

対 象：吉野川市国際交流協会日本語教室

授業者：鳴門教育大学大学院生3人

参加者：学習者17人（ベトナム11人、フィリピン3人、インドネシア2人、中国1人）、支援者5人（支援2人、観察3人）

協力者：鳴門教育大学大学院生2人

4. 3. 学習目標

- ・わからない言葉の意味を日本語で尋ねることができる。
- ・日本語で質問して、会話を広げることができる。

4. 4. 授業内容

授業の内容は表3の通りである。

表3 授業実践②の授業内容

	内 容	形 態
1	アイスブレイキング (10分)	グループ
2	文型「〇〇ってなんですか。」導入とすごろくのルール説明 (20分)	全 体
3	すごろくを用いた対話活動 (50分)	グループ
4	ワークシートのシェア (15分)	グループ

授業の中心は、3のすごろくを用いた対話活動である。すごろくは、徳島県国際交流協会企画作成の『おもっしょいじょ！とくしま日本語教材例集』より、「すごろく（初級編）」を改編したもの⁵を使用した（資料2参照）。このすごろくは、マスに記入されている質問に答えながら遊ぶものである。質問のやり取りをする中で、学習者によってはわからない言葉が出てくると予想された。そこで、わからない言葉を学習者自ら尋ねることができるよう、2で「〇〇ってなんですか」という文型を導入した。

すごろくは、対話を促進するために以下のようなオリジナルルールで行った。

- ・さいころを振る人の対角にいる人を、質問の人とする。
- ・コマが止まったマスに書かれている質問を質問の人が読み、さいころの人が答える。
- ・質問の人は、答えに対してもう一度質問をし、さいころの人は答える。
- ・「？」のマスでは、質問の人が自由に質問を考える。
- ・一番早くゴールした人と、「〇〇ってなんですか。」を一番多く言った人の2人を勝ちとする。

活動中には、グループで話したキーワードなどを、グループで共有するワークシートに書き込むようにした（資料3参照）。ワークシートは4で他のグループに回覧し、他のグループの学習の記録に目を通すことで、新しい知識を取り入れたり復習したりできるようにした。

学習グループは授業実践①と同様に構成し、同じ母語の学習者になるべく同じグループにならないよう、授業者が振り分けた。

4. 5. 成果と課題

授業後のアンケートから、学習者は概ね学習目標を達成できたことがわかった。また、支援者からも、学習者は積極的に会話していたという感想があった。以上から、1つ目の目的は達成されたと言える。

授業後の反省会（鳴門教育大学大学院生・指導者と

YIA 日本語教室の支援者で行った。）やアンケートでは、支援者から、すごろくを使った授業を自分もしてみたい、という意見があった。以上から、2つ目の目的を達成できたと言える。なお、本すごろくに使用した教具は YIA 日本語教室に寄贈したが、同協会で2020年1月12日に開催された「もちつき大会」の余興として行われ、好評だったとのことである。

以上の成果とともに、課題が1つ明らかになった。今回の授業では、初級と中級の学習者が混在するグループがあった。学習目標を「わからない言葉の意味を日本語で尋ねることができる。」としていたが、初級と中級では知っている語彙数に差があるため、初級の学習者の尋ねる頻度が高くなってしまったようだ。授業後に行った反省会で、「初級の学習者は、自分ばかりが質問することで自分の日本語能力が低いことを露見させていると思ったようで、恥ずかしそうにして後半はあまり質問しなかった。」という意見があった。質問した数を競うことで学習意欲を高める効果を狙ったのだったが、それが逆効果になったようだ。疑問文を使用した活動では、学習者の個人的な情報や考え等を聞くことがある。学習者の気持ちに十分留意した方法を考える必要がある。

5. おわりに

今回の取り組みでは、地域日本語教室の特性にあわせて、対話を中心とした活動を取り入れた授業を2回実践した。学習者と支援者の両方に大変満足していただけたことが、本実践の何よりの成果である。加えて、日本語教室の特性にあった、形を変えて今後も続けられるような授業を提案することができた。今回の実践が、吉野川市国際交流協会日本語教室の発展に何か役立つことができれば、と願うばかりである。

地域の日本語教室は、その教室ごとに特性が大きく異なる。教室を運営・支援する日本人、教室に通う学習者、教室環境などの情報がよく吟味され、その日本語教室の特性にあった授業が展開されていくことが望ましいと考える。著者の一人である鈴木は、今後も継続して吉野川市国際交流協会日本語教室を支援する予定である。今回の実践を踏まえ、日本語教室における多様な授業の在り方を模索していきたい。

謝辞

本授業の実践にあたり、準備段階で大変お世話になった野水祥子さん、快く実践研究の場を提供してくださった吉野川市国際交流協会の萩森健治会長をはじめとする日本語教室の皆様方に、心より御礼申し上げます。

また、本授業実践は、2019年度「教育実践フィール

ド研究（国語科）」の授業において、言語系コース（国語）に所属する駒形嘉信さん、重村美代子さん、島津亜希さんとともに取り組んだものです。3名のメンバーと、準備段階から様々なアドバイスをくださった田中大輝先生にも、心より御礼申し上げます。

注

- ここでは、中長期在留者及び特別永住者からなる在留外国人の人数を取り上げた。在留外国人統計（旧登録外国人統計）のうち「都道府県別 国籍・地域別 在留外国人数」の総数を記した。

政府統計の総合窓口（e-Stat）、在留外国人統計（旧登録外国人統計）、都道府県別 国籍・地域別 在留外国人、https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20190&month=12040606&tclass1=000001060399&stat_infid=000031886385（アクセス確認 2020. 3. 12）

- 注1と同じ統計より、徳島県の総数を記した。
- 本稿の2節と3節は、日本語教育学会 2019 年度第 2 回支部集会【四国支部】「現場から発信！四国の日本語教育研究事情 2019」において、「地域日本語教室における対話を中心とした活動の試み」という題目で発表した内容に加筆したものである。
- 学習者の日本語使用環境は、ほとんどが実習先の企業等であり、会話の相手は徳島方言話者だと思われた。このような事情を踏まえ、スクリプトは共通語話者と徳島方言話者の会話文にした。また、会話の音源は、はえぬきの徳島方言話者のご協力を得て作成した。
- すごろくは、入門、初級、中級の3種類があったが、学習者のレベルにあわせて初級を選出した。また、対話を促進するため、自由質問マス等のアレンジを加えたものを授業者が作成した。

資料

【資料1 授業実践①ワークシート例（学習者記入）】

何を するか 書いてください。	じゃんばん	発表する人
<p>グループの みんなで 阿波おどりを 楽しむ 計画を たてましょう</p> <p>なまえ： _____</p> <p>1. 何を するか 決めましょう。</p> <p>2. 地図を 見ながら じゃんばんを 決めましょう。</p> <p>3. だれが どれを 発表するか 決めましょう。</p>		
<p>どこで 何を 食べますか。</p> <p>＊あまのり ちかくの おでん 焼きそばを たべよう。</p>	①	
<p>どこで おどりを 見ますか。</p> <p>えんぶじょうの さいきよおどりを みよう。</p>	②	
<p>どこで どんな写真を とりますか。</p> <p>えんぶじょうで おんぎのうた おどりをとりま</p>	④	
<p>どんな人と どんな話を しますか。</p> <p>おなりのうたと しままは しゃべり とっていい話 しゃべり たいよう。</p>	③	

【資料2 授業実践②すごろくシート】

好きな色は何ですか。		あなたの一番好きな日本の食べ物は何ですか。	あなたの国の有名な食べ物は何ですか。	日本どこへ行きたいですか。	好きなアニメは何ですか。	徳島で行ってみたい場所はどこですか。
サイコロを振って1、3、5が出れば3マス進む。						あなたはペットを飼っていますか。
あなたの行ってみたい国ベスト3を教えてください。	スタート!					右隣の人と「じゃんけん」をして勝てば3つ進む。
日本の首都はどこですか。						
	好きな動物は何ですか。			あなたの夢は何ですか。	休みの日に何がしたいですか。	徳島県以外で行ったことがある県はどこですか。
	あなたの国のことばで「ありがとう」は何ですか。	あなたの国の有名な食べ物は何ですか。	うれしかったことは何ですか。		日本に来てびっくりしたことは何ですか。	サイコロを振って2、4が出たら2マス進む。
ゴール!						好きな季節はいつですか。それはなぜですか。

【資料3 授業実践②ワークシート例 (学習者・日本語支援者記入)】

2019年12月15日(日) 吉野川市国際交流協会 日本語教室

なまえ				
ポイント	工	T	T	(正)
ゴールの順番	(2)	(1)	(4)	(2)

Dragon 河内 0ラオス ②カオシ ③PXLK 静岡 平和 best 対不起

Dragon. Dragon. Dragon.

って何ですか。

参考文献・参考資料

- 御館久里恵, 「地域日本語教室における「対話中心の活動」の意義と効果に関する研究」, 『地域日本語教室における「対話中心の活動」の意義と効果に関する研究 平成23年度～24年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) [若手研究(B)] (課題番号:23720266) 研究成果報告書』, pp.1 - 83, 2013.
- 御館久里恵, 「地域日本語教育に関わる人材の育成」, 『日本語教育』, 172, pp.3 - 17, 2004.
- 重村美代子・鈴木優香・島津亜希・廣田知子, 地域日本語教室における対話を中心とした活動の試み, 日本語教育学会2019年度第2回支部集会【四国支部】、香川大学教育学部(高松市), 2019. 10. 19.

- 徳島県商工労働観光部国際企画課・徳島県国際交流協会(企画制作), 『おもっしょいじょ! とくしま日本語教材例集』, 2017.
- 中川かず子・神谷順子, 「道内外国人技能実習生の日本語学習環境をめぐる課題: 受け入れ推進地域を事例として」, 『開発論集』, 99, pp.15 - 32, 2007.
- 馮偉強, 「中国人研修生・技能実習生の日本語習得とニッポン」, 『愛知大学国際問題研究所紀要』, 142, pp.153 - 181, 2013.
- 吉野川市国際交流協会, 『国際交流よしのがわ』, 第15号, 2019
- 吉野川市国際交流協会, 『吉野川市国際交流協会 日本語教室の歩み』, 2015.